

病院のコロナ破綻防げ

政府の新型コロナウイルス感染症対策分科会が「七月下旬がピークだった」との見解を発表するなど、流行の小休止傾向も見えるが、コロナ禍が医療機関に残したダメージは大きい。赤字が百億円になると訴える大学病院もあれば、患者の受診控えで収入が激減した街の診療所も。そんな中、ある大学助教が「国は赤字の病院を救ってほしい」と呼び掛ける署名活動で四万人超の賛同を集めめた。医療機関のコロナ破綻を防ぐために、今すべきことは言つた。

（木原音子、横原崇）

「このよつた署名活動をしたのは、初めてです。もちろんこれまでも、議員会館に入つたことはあります。東京・永田町の参院議員会館ロビーで、「医療を守ろうプロジェクト」代表の室生暉さん（みやまきさん）は言つた。

プロジェクトといつても、実質的に活動するのは、都内の医大病院助教で、臨床解剖学を専攻する研究者でもある室生さん一人だ。医療機関がコロナ禍で疲弊し経喫難に陥っている状況を心配していた。一方、インターネット上で体校中の学生半額を求める動きやライブハウスを守る寄付など、アクションが活発化する動きも見えていた。「自分にも何かできるかもしない」と思い立つ六月下旬。

「コロナ禍は医療機関の経営に多大な影響を及ぼしている。日本病院会などの病院団体が八月六日に発表した調査結果によると、全国の病院のうち、四一・六月に赤字だった病院は全体の六割以上に上った。新型コロナの患者を受け入れた病院はより深刻で、八割超が赤字になつた。

相沢孝夫会長は「延期できる手

百七十六筆の名簿データなど、署

て、医療機関への財政支援を求め、共産党の国会議員に病院の現状などを説明する室生さん（右奥）=いずれも東京・永田町の参院議員会館で

（左）署名を集めた室生暉さん

（右）署名活動を始めた室生暉さん

（左）署名活動を始めた室生暉さん

（右）署名活動を始めた室生暉さん